

Title	ジパングよりジャパンへの推移
Sub Title	From Zipangu to Japan
Author	岡本, 良知(Okamoto, Yoshitomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.2 (1933. 5) ,p.1(173)- 8(180)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330500-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジバングよりジャパンへの推移

岡 本 良 知

ヨーロッパ人が日本をジャパンまたはジャボンと稱する。この語が數百年の間に如何に綴字や發音上に變化をして來たかを歴史的に回顧しやうとするのがこの小文の目的である。英語や佛語へは他の歐洲語より移されたのであるから、この語の變遷を考へるには寧ろ主としてそれらの他國語に依らねばならぬ。ジャパンのヨーロッパ諸國語に於ける源流は有名な *Jipangu* に求められる。ジバングがマルコ・ポーロの一二九六年より九九九年の間、ヴェネチヤの獄中で口授した旅行記の一節に由來することも周知である。その語の源を窺めその意義を論ずることは既に世の碩學によつて行はれたから、こゝにはそれらを開却する。

ヨーロッパ人が初めて直接に日本を踏むに至る十六世紀中頃までは、マルコ・ポーロの旅行記が日本

に關する唯一の典據であつたから、その間に作られた一切の極東に關する消息や地圖類にはジバングと述べられてゐることは蓋し明かであらう。併し私はこの二世紀半の間に著はされたヨーロッパの諸書に精通してゐないから、こゝには唯一つの例として一四七四年六月二十五日フィレンツェで書かれたかの有名な星學者パオロ・トスカネリのクリストバル・コロロン及びフェルナンド・マルチーネスに宛てた書翰を擧げるに止める。この書翰はコロロンにヨーロッパより西航して印度に達すべきを暗示し、遂にアメリカ發見を達成せしめるに至る最大の動因を與へた著名な文であるから、これ亦世人の熟知するものであるが、駄足としてその一節を抄出する。「アンチリヤ島よりシバンゴ (Cipango) までは十エスバシオ即ち二百二十五レグアを計算せられる。そは甚だ寶石及び黄金に富む故に寺院王宮等は金板を以て覆はれる。」(Colección de los Viajes……por D. M. F. de Navarrete. Tomo II. Documentos de Colon y de las primeras poblaciones. Madrid, 1825. P. 3)。

地圖では、テレンキー氏 (Paul Graf Teleki, Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen Inseln. Budapest, 1909) 及びダーブルグレン氏 (Los Débuts de la Cartographie du Japon par E. W. Dahlgren. Upsal, 1911) の研究に據れば、先づ一四五九年のフラ・マサロの地圖に Ziripagi (或は Zimpag) とも讀み得る。藤田元春氏著日本地理學史には Zimpao と讀んでゐる。) が Zipangu の誤り贖しであり、一四九二年のマルチン・ベハイムの地球儀にある Cipango、翌年のラオンの地球儀に見える Zipangu

等は十五世紀の例として挙げられる。

十六世紀に入つて、既にポルトガル人が印度に達し、一五一〇年前後にはマラッカ、スマトラ等にも来た。従つて彼等は極東の諸民族と屢々直接に接觸するやうになつた。そのうちには日本人も加はつてゐたかも知れない。または間接に日本のことが聞き知られたかも知れない。若しそうであつたとすればマルコ・ポーロによつて傳へられたジバングをその儘に承けたか、または他の名稱を作つたであらうと想像出来る。今これを文書に照して見るに、私の知る限りでは、マラッカ附近に達した頃までは未だ日本に該當する名稱を發見することが出来ない。彼等はそこに多くの支那人と支那のこと、またときに琉球即ちレキオとレキオ人のことを書き、日本人ではないかと思はれるやうな名をも記したが、ジバング若しくはジャバンに類するものが絶へて見當らない。

一五一七年にはポルトガルの使節を載せた艦隊が南支那へ来た。こゝに至つて、倭寇として海外に發展してゐた日本人と接觸しなかつたとは想像し難い。このとき的情勢を敘述した一史にその名が現はれる。仍ち *Chronica do felicissimo rei Dom Emmanuel por Damião de Goes, Lisboa, 1567* である。この書には、艦隊がタマウ島にあつたとき、そこへレケオス・グオーロス・ジャボンゴス (*Japongos*) の船が来たといひ、また金銀を齎らすものとしてレケオス・ゴーロス・ヤボンゴス (*Japongos*) を挙げた。このヤボンゴス、ジャボンゴスは日本人の意義であるから、日本そのものを指すにはヤボンゴまたはジャボン

ゴといつたであらう。この書は一五六二年に著はされたがその資料は主として事實の起つたときの報告書であつたから、ジバング以後に於けるその變形の最も早く見えた名稱と考へねばならぬ。

次に、ポルトガル人極東進出の初期の史書として日本の名を載せたのは、ジョアン・デ・バロスの *Dica da da Asia* である。その書第一編第九卷第一章に支那附近の地理を記したうちに、「吾人はレキオスとジヤポエンス (*Japoes*) の諸島、及びまた大陸であるや否やその大きさを詳にしないミヤコ州にまで」云々といひ、同第十卷第一章にアジャ大陸縁邊の群島を指摘し、「スマトラ、ジャワ、チモル、ブルネオ、バンダ、マルッコ、レキオ及び最終點としてジヤポエンス諸島、ミヤコの大州がある。」と述べ、また第三編第五卷第五章に「シंगाポール海峡といふ海峡を北方へ向ふものがある。そのうちにはジヤパン (*Japan*)、レキオス、ルソンエス」云々と記した。バロスの著書の第一編は一五五二年に、第三編は一五六三年に出版せられたが、その執筆せられたのは一五四八年以前で、略々日本が未だ印度のヨーロッパ人に充分知られぬ頃で、これらの敘述は當時間接に聞き得たところを綜合して作つた地誌である。そこに現はれるジヤパンとジヤポエンスは、ダミアン・デ・ゴエスのジヤポンゴとジヤボンゴスより遙かに進化した、殆んどジバングの直接の影響を脱し現代の名稱に近づいてゐる。然し、ジヤパンがバロスに發祥したとするならば、同世紀のポルトガル人に久しくその綴りを踏襲せしめたのみならず、その他の國語へもその音を傳承せしめた劃期的な名稱である。

一五四二年始めて日本の種子島に着いたといはれるポルトガル人のことを報道したアントニオ・ガルワンの *Tratado que compôs o nobre & notavel capitão Antonio Galvão... Lisboa, 1563* のその頃には「この人のヤポエンス *Japões* と稱し、古書が語り傳へるかのシバングス *Sipangas* のやうである。」(七六葉)と記されてある。嚴密にいへばヤポエンスは日本人の意義であるが、同世紀には屢々日本といふときにも混用せられてゐる。日本人をヤポエンスとすれば日本はヤバンであるが、ガルワンは恐らくバロスの著書よりこの名を承けたのであらう。而も、親切にもマルコ・ポーロによる舊名と同國を指すことを註した。

同じく日本発見のことを載せたディオゴ・デ・コウトの *Decada da Asia* (第五編第八卷第十二章)には「彼等(日本人)からその諸島をニボンジ *Nipongi* といはれるを知つた。今普通に我等はジャバン *Japão* といふ。(中略)嘗てヴェネチヤ人マルコ・ポーロがこの諸島をシバンゴ (*Zirango*)と名づけて早くから世に知らしめたけれども」云々と述べられた。この書は一六一二年に出版になり、著作も一五六〇年から一五七〇年の間になされたから、その頃は印度から日本へ多くの人が往來し詳かな日本の事情を知ることが出来た。従つてこの名稱も更に進化してそこに現はれるジャバンは現代の語と全く同じくなり、また日本をニッポンと稱することも聞き傳へそれを叱つてニボンジとも記載したのであらう。

また日本発見者の一人だといはれるフェルナン・メンデス・ピントの *Peregrinação* の中、その発見の一節

にヤパン (Japão) といふ語が見える。併し、その著作のときが一五八〇年頃であつたから名稱としてはあまり重要でない。

一五四四年に暹羅より支那船で日本へ來たエスバニヤ人ペロ・デイエスの消息を載せたガルシャ・デ・エスカランテ・アルバラードの一五四八年八月一日付書翰にはハパン島 (islas de Japan) と見え (Colección de los viajes. Tomo. VI. P. 203, 204)。現代のエスバニヤ語 Japon よりは古い綴りであつて、當時のポルトガル語の影響を受けてゐる。

一五四六年に薩摩へ來たカピタン・ジョルジ・アルワレスの同年末に聖フランシスコ・シャヴィエルへ宛てた報告書にはハポン (la tierra de Japon) とあり、日本人はハポネスといはれてゐる。(Missões dos Jesuitas no Oriente... por J. P. A. da C. Manoel. Lisboa, 1864. P. 113)。全く現代のエスバニヤ語と同じ。併し、その報告書には別にポルトガル語の文も存し、果して何れが原文であるか斷じ難いからそのハポンもハポネスもアルワレス自身に綴つたかどうか信じられぬが、假にポルトガル文から翻譯せられたとしても、そのときよりあまり時が隔つてゐないであらう。

その報告書を受け取つた聖フランシスコが一五四八年一月二十日コチンからローマへ發した書翰にそのことを傳へて、一商人が発見せられて久しからぬ日本といふ諸島から珍らしい報告をよこしたと述べたとき日本を *las islas de Japon* といひ日本人をも Japon と記した。(前同書 P. 76) 同年十一月二十

日に出した日本人パウロ・デ・サンタ・フェの書翰にも *Pablo de Japon, Tierra de Japon* と稱した。この二書翰も、亦アルワールスの書翰に對していつた如く、ラテン語とポルトガル語の同書と何れが當時の翻譯であるか斷じ難い。

聖ノランシスコが日本到着後發した書翰（一五四九年六月二十二日付、十一月五日付）には多く *Japann* または *Iappam* (*Cartas de Japio* に據る) と稱し、一五五二年四月八日ゴアから出した書翰には *Japio* (*Monumenta Xaveriana. r. 732* に據る) と綴つた。こゝに至つては殆んど現代のポルトガル語に異ならない。

以上はアジャに於けるヨーロッパ人の東進に従つてジバングの音と綴りが變更せられた次第を述べたが、次に翻つて、ヨーロッパの地理學界に於てその名が變つていつた跡を見やう。これ亦ポルトガル人の航海の發展と共に進化したことは明かであるが、幾分遅れ勝ちであつた。

十六世紀初半に出來た世界地圖は尙十五世紀に追隨して日本をジバングとして表はした。一五〇二年のカネリオの地圖に於けるシンジリナ *Cingirina* がジバングの毗であるらしく、その島がアジャの東縁に描かれ、また一五〇六年のコンタリニの地圖はフロンのアメリカ發見の知識を容れ南アメリカの北西にジバングを置き、一五一〇年のルノックスの地球儀も同じ位置にジバングを現はし、一五一五年のシエーネルはその稍々南方に偏らしめた。この世紀の半に至るまでは多くの世界圖にアメリカ大陸の狀況

は次第に加へられて行つたが、マラッカ半島以東の極東は舊態依然として發展せず幾分の位置を變じてジバングの名が存し、終に一五四八年のガスタルジの地圖に及んだ。

マルコ・ポーロの影響を脱し、初めてジャバンの名が現はれたのは一五五〇年のガスタルジの地圖である。そこにはジバングは除かれジャバン (Giapan) が新に加へられた。この名稱は現代のイタリア語のジャポネ (Giappone) に遠くポルトガル語のジャバンに近い音を保つ。それより以後一五六一年の地圖に Giapan と綴り、六六年、七〇年等續けて刊行せられたガスタルジの圖に傳へて行つた。一五七〇年のオルテリウスの地圖に初めてヤパン (Japan) と稱せられて以來、殆んど何れの地圖もそれに一致し、Japan, Japan と書かれるやうになつた。